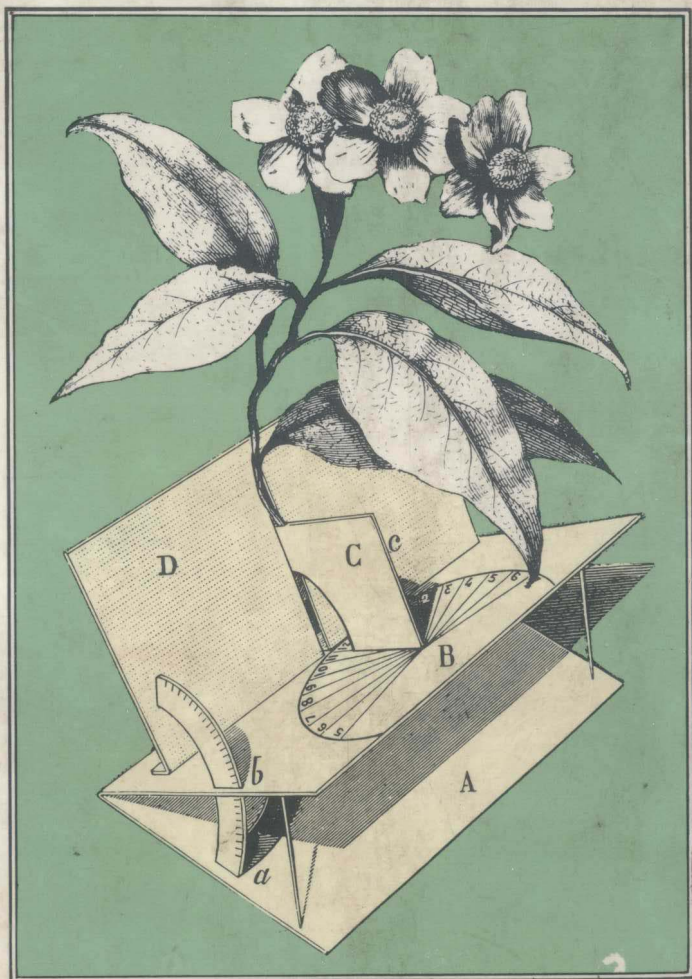


独り暮らし

一ノ瀬 綾



独り暮らし

一ノ瀬 綾



筑摩書房

一ノ瀬綾（いちのせ あや）

1932年、長野県に生れる。1969年、小説「春の終り」で第12回農民文学賞受賞。1976年、「黄の花」で第16回田村俊子賞受賞。新日本文学会会員。主な著書に『黄の花』『遠い朝』がある。

独り暮らし

一九八二年一月二十日 初版第一刷発行
一九八二年四月二十日 初版第三刷発行

著者／一ノ瀬綾

発行者／布川角左衛門

発行所／株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小山町二一八
電話東京二九一一七六五一（営業）

二九四一六七二一（編集）

振替東京六一四一一二三

郵便番号一〇一一九一

印刷／多田印刷 製本／積信堂

装幀／野中ユリ

Printed in Japan ©一ノ瀬綾 1982

0093-80215-4604

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが小社読者係宛に御
送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

独り暮らし

目次

冬を抱く	5
雪の町	65
生きる時	109
傷痕	153
独り暮らし	203

冬を抱く

横揺れの激しい車体を軋ませて、路面電車が止まった。反動でよろける泰子の細腰を、背後で志田の右手が支えてくれた。ステップに降りた泰子の頭上から、志田は折れこむように長身の上体をかがめて囁いた。

「不採用になって、もともとだ、そう思うこと。気楽に受けてみなさい」

後の乗客に押されて返事をしそびれた泰子は、降り立った路上から振り返った。

「うまくやるわよ……」

明るく答えた鼻先でドアが閉まって、眼鏡をかけた志田の顔が、ガラス窓越しにゆがんで映った。小ぶりで逆三角型の顔が泣いているように見えたが、志田は笑っていたのだ。泰子をなだめたり、すかしたり、励ましたりする時、志田はいつも気弱そうな微笑を泛かべる。そんな表情のままおだやかな口調で同じ意見をくり返されると、それまで泰子の気持を塞いでいた乾きや不安や苛立ちが、いつの間にかほぐれて和んでしまう。

地響きと車輪の擦過音を残して電車が遠ざかった。志田が行ってしまうと急に心細さがむきだしになって、泰子は頼りない思いであたりを見廻した。

初めて来た街だった。右も左も古びて黒ずんだ軒の低い二階家が並び、線路の向う側には灰色のコンクリート塀が続いていた。塀の奥に寺の屋根が見える。泰子はしばらく佇んでいた。

どっちを向いて歩き出せばいいのか判らない。泰子はいつでも乗り物から降りると、知った所でも方向の見当がつかなくなる。駅のホームの乗り替えや出口はたいい間違えるし、自分のアパートに居てさえ、話の中で場所を示すのに反対方向を差して気がつかなかった。そんな泰子に志田は呆れ、やがて本気で心配した。郷里の山村から上京して、かれこれ二年になろうとしてゐる。——慣れ不慣れに関係ないな、まるで触角を失くした昆虫ってとこだ……。志田は笑いながら、泰子が出かける時、あらかじめ判っている場所は必らず略図を書いて持たせるようになった。これから面接を受けに行く会社の所在地も、泰子が電話で問い合わせたとおりに志田が地図を書いてくれた。私鉄から国電に、更に都電に乗り替えるコースは、泰子にとってひと苦労だった。面接時間に間に合うかと気をもむ泰子のために、志田は自分の通勤の足を延ばして同行してくれた。志田の勤める私立の女子高校が、今降りた都電と国電が交わった地帯の街に在ると聞かされても、泰子には實在感も湧かず、方角の見当もつかなかった。

志田の書いてくれた地図を出して見た。降りた停留所から右へ百メートル、その先の小路を曲って五分、花屋の角を左へ折れる。その数軒先に森田商事株式会社がある筈だった。泰子が新聞でこの商社会社の求人広告を見つけた日、折よく志田が泰子の部屋に居合わせた。志田は

自分の都合のついた時にだけ、一方的に訪れる。泰子が不在の時は、渡してある合鍵で部屋へ入り、待っている時があれば、メモを残して帰ることもあった。

その日は土曜日で、志田は珍しく夕方の早い時刻にやって来た。泰子は志田に新聞を見せた。

——商事会社って、なにをするの？ 農家に生れ、上京するまで村で暮らした泰子には、「商事会社」の内容がわからなかった。志田は笑った。——商事だから、あきないごと……商売さ。

会社組織になっていれば八百屋だって商事会社だ。ピンからキリまであるよ。教師の口調になりながら、泰子が広げる新聞を覗いた。——真珠、アクセサリ、宝飾？ なんだろう、これは……宝石店のことかな。その続きを泰子が声を張って読みあげた。——女子営業部員七名、デパート派遣、地方出張勤務可能者、高卒、年齢三十まで……。志田はもう興味の無い顔で、別の記事に眼を移していた。——わたし、この会社の面接受けてみようかな……。泰子の声に、

志田が視線を向けた。——ここ、三十まで採用でしょう？ そんなら二十八のわたしだって、

資格があるもんネ。泰子が広告のその箇所を指で示すと、志田はちょっと息を引き、それから例の気弱な微笑を泛かべた。——宝石だ、出張だって……泰子には無理だ、やめなさい。商売は向き不向きがある。それに……。口ごもる志田に、泰子は被せるように言った。——わたしの学歴が、高校中退だから駄目だ、そう言いたいんでしょう？ 志田はまともには受けず、おだやかな口調のまま、——もっと身近で、自分にできる仕事を探した方がいい。泰子は、子供

のような一途さで首を横に振った。——駄目よ、わたしみたいな田舎者……どこへ行ったら、この年じゃ、中途半端で使ってくれやしない。それは、あなたが一番よく知ってるじゃないの……。しゃべっているうちに泰子の声は波立ってきた。上京してから半年近く、職探して味わった惨めな体験が、その時の失意や屈辱とともに甦る。

中卒でも十代なら金の卵の時勢だが、二十五過ぎの女は相手にされない。職業安定所の求人も新聞の求人広告も、大方は二十五歳止まりだ。学歴年齢不問、という条件ばかり探す泰子に、安定所の係員が言った。——まだ若いんだ、早く結婚しなさい。——結婚したくないから、仕事を探してるんです。言い返した泰子を、係員は冷やかに見据えた。——そんなら、一生続けられる特技でも身に付けてから出直すことだね。一言もなく引き下がった。

保険の外交も化粧品セールスもやってみたが、方向音痴の泰子には半月と続かなかった。ビルの掃除婦、旅館や料理屋の女中は、経験がないからと断わられた。たぶん、泰子の固い物腰や青臭い氣負いが敬遠されたのだろう。あとは住込みの手伝いか、家政婦、水商売だけが残っていた。たて続けに断わられると、人に接する仕事に怖気づき、面接に行く氣力が萎えた。ようやく落ち着けたのが小さな町工場だった。

そこでは、テレビの細かい部品を磨いて、ビニールカバーをかけ、箱詰めにする作業をしていた。アパートから歩いて通える便利さもあって、泰子はその町工場で一年半近い月日を働い

た。そのおかげで、スーツケース一つで上京した泰子も、どうやら独り暮らしの目処がついたのだった。その工場が、道路拡張のため移転することに決まって一カ月になる。泰子は今月中に新しい仕事先を見つけねばならなかった。毎朝、新聞を眺めても、求人条件は上京当時とはほとんど変らない。どうせ出直すなら少しでもいい条件の仕事に移りたかった。今の工場は単純作業で時間給だから、給料も安く仕事に対する張りや意欲を湧かせようがなかった。その日暮らしはもうたくさんだった。せめて一年先でいい、生活に見通しの立つ、やり甲斐のある仕事に就きたい。明日への希望を持ちたい。泰子は喘ぐように思っていた。

——ねえ、いいことがあるわ。履歴書に、高卒って書くの……嘘がばれたらその時よ。採用されたって、いつ辞めてもいい覚悟があれば、怖くなんかない。中退だって卒業だって、要は本人のやる気でしょう？ 意気込む泰子を見て、志田は苦笑した。——気がすむんだったら行ってごらん。ま、うるさい会社なら、採用後に卒業証明書とか、成績証明書を要求するだろうが……その時は、また考えよう。

地図を辿って行くと花屋の前に出た。角店で、ガラス戸の内側には、菊やカーネーションや名も知らぬ花々が群らがって咲いていた。泰子はほっと足を止める。面接は十時からだった。充分間に合うと思ったら、急に自分の身なりが気になりだした。泰子は上体をひねって花屋のウィンドーに目をやった。茶色のコートを着た、小柄で顔色の悪い女が映っていた。化粧直し

をしなればと思う。流行おくれのツイードのコートは、泰子が上京して初めて買ったまともな品だった。中身のワンピースは、三年も前、田舎で洋裁をやっていた友人が仕立ててくれたもので、野暮ったくて地味なスタイルだ。それでも今の泰子には、これが唯一の外出着だった。ふっと気がつくと、泰子の脇を若い女の二人連れが通った。直感的に応募者だと思う。泰子は急いで二人の後を追った。木造二階建の、アパートまがいの家の中に女達が消えた。近づいて見ると、玄関のガラス扉に、「森田商事」と金文字で社名が書き込まれていた。泰子は扉を押した。細長い三和土をはさんで、右側は受付のカウンター、左側は奥へ廊下で通じている。窓口の若い女子事務員が、泰子を認めて声をかけた。

「応募の方ですね、ご苦労さまです。履歴書をこちらへお出しください」

泰子は慌ててハンドバッグから履歴書を出した。昨夜おそくまでかかって何枚も書き直したので、一字一句が目の底に灼きついていて、貧しい履歴の中に、偽りの年月日と文字が黒々と浮きだして視えた。泰子は胸苦しさをこらえてじっと立っていた。窓口の事務員が泰子の背後を指差して言った。

「そちらの控え室でお待ちください」

廊下の突き当りのドアを押して、泰子のはっとした。早い方だろうと思ったのに、室内にはもう二十人以上の応募者が待っていた。先へ入った二人連れも、友達なのか肩を寄せて窓際の

長椅子にかけていた。みんな若い。化粧も身なりもそれぞれ垢抜けていて、中にはしゃれた手つきで煙草を喫っている女もある。泰子は空いた席に坐りながら、気押された思いで彼女達を眺めた。迂闊にも泰子は、自分に近い年齢の応募者ばかりを予想していた。真先にふるい落とされるかもしれない。一度に気が減入った。

所在なく見廻すと飾り棚が目についた。黒ビロードの台の上に、真珠のネックレスやブローチが幾つか展示されていた。壁にはあこや貝の標本が、成長過程の順で並んでいる。どちらも間近で見るのは初めてだった。値段がないので判らないが、いずれ何万円とするのだろう。採用になれば自分もこんな品が扱える、そう思っただけで泰子は緊張した。そしてすぐ、ビーズのネックレスさえ身に付けたことのない自分をかえりみた。そんな女が口先で客をあしらう図を想像する。他人の目で眺めるとひどく滑稽だった。少し気分にくどりができた。いつの間にか控え室の椅子は塞がり、応募者は三十人近くに増えていた。

「お待ちせしました」

事務服を着た若い男が部屋へ入って来た。手にしたプリントを配りながら、

「面接に先だって、少し書いてもらいます。常識問題と簡単な計算です。ボールペンの要る方は申し出て下さい……」

応募者の間にざわめきが流れた。予想外の動揺はすぐ泰子にも伝染して、忽ち胸がかたくな

る。ソロバンが配られた。問題のプリントは、四桁の数字の加減算と、デパートに関する用語の書き取りだった。落ちついてやれば大丈夫と見当がつくと、肩の力が抜けた。先に書き取りを片づけ、ソロバンは慎重に二度検算した。周囲を見ると、まだ誰もが机にしがみついている。ふっと泰子の気持にゆとりが生じた。どこに中退と卒業の差があるのかと思う。ペンを置いた泰子を見て係の男が寄って来た。

「よろしかったら、いただきますよ」

周囲に気を配るふうもなく、男は泰子の答案用紙を取りあげた。室内の気配が揺れ、ソロバンの音が高くなった。首をめぐらせて泰子を見る者もいた。やがて数人が提出すると、後はつられたようにいっせいにペンを置いてしまった。でき次第集めるやり方は、時間の競争も目的かと思えてくる。面接が始まった。順番に呼ばれる一人当りの面接時間は、意外なほど短い。待っているうちに泰子は、もうどうにでもなれ、と半分居直った気分になっていた。

「水沢泰子さん……」

呼ばれて面接室のドアを押した。正面の壁際の机に、男と女が並んでこっちを見ていた。男は四十代の初めか、小柄な軀にそぐわない角張った顔立ちで、刻んだような細い目許が鋭い。女は泰子と同一歳ぐらいか。細面で中高の顔に、張りのある涼しげな眸と細い眉がしっくりと収まっていた。淡いピンクのツーピースを自然に着こなしている。二人は泰子を計るように眺